

→二条城で新旧二人の作家の作品を読み比べる

2022.3.13 (日) カルチャーウォーキング 関西文学散歩 第 566 回 参加報告

■『その後の慶喜』も急遽、通読した。

江戸に逃げ帰り、ただただ「恭順」を示すことから始まって、大正2年に没するまでの長い慶喜の余生のことを知ったところで、「しょうもないかも」だったが、せっかくの機会と急いで読み進めた。詳細な記述で、けっこうおもしろく得ることも多々あった。

人生100歳の今日、余生の過ごし方のお手本。無論、彼のように財があり、最晩年には侯爵に叙せられたお陰もあってお金に糸目を付けず、気が赴くまま趣味に遊ぶようなことは、庶民には出来ない。が、心の持ちようは学べたようにおもう。

また、戦後GHQに廃された「華族制度」のことも垣間見た思いだ。

■明治維新の最大の功労者か？

昼食後、二の丸御殿に入り、豪華絢爛な桃山文化空間を体験させて頂いた。「大広間」には「大政奉還」の様子を再現するかのように入形が置かれていた。この空間に浸りながら、慶喜というお方の歴史的意義におもいを馳せた。

会津藩主や桑津藩主などを「江戸に帰り体勢を立て直し、薩長勢力に立ち向かう」と想ってもみないことで説得したようなので、正直トップの風上に置けない御仁とさげすみたくなる。また、のうのうと自分は40数年余生を過す「勝手気ままな」お坊ちゃんとあきれる。

■が、

明治維新の本質の一つは、武士階級が自らの手で武士を廃止したという、前代未聞の政変であるという話を先日、福井雄三(歴史学者・東京国際大学教授)という先生から聴いた。慶喜は、坂本龍馬のアイデア「朝廷に政治をお戻しする」ことを勧められ、それにあっさり乗ったということが、世界史上にない「支配者層の自死」を引き寄せたと考えると、評価は180度替わる。確かに明治維新の最大功労者なのである。

しかし、明治維新のもう一人の功労者西郷隆盛が新政府に反抗する者に担ぎ出され、最後は「ここらでよかろう」と自決した「潔さ」と彼が果たした「反乱を収める役割」からは、慶喜の心根はかけ離れていて、慶喜の決心以降の流れは彼から見ると偶然とも解釈出来る。

従って慶喜に好意を持つ人は極めて少ないと思う。

■天守閣跡

最後に、1750年に焼失した天守跡から京都の町並みを少しばかり見渡し、解散となった。時に12時30分。後は、見残したところ等をゆっくりと自由散策だ。

(2022/03/28)